

を示し。兩頬、肉全く落ちて骨立ち。口元堅く緊りて、強固の意志と決断力の大きなを示す。容貌全體よりせば、驚くべき智力の人たるを示すと同時に、其エキスプレシヨンに驚くべき靈的の所あり。克己、制欲、修養の跡あり、其面に讀まれ。一見して偉大なるモンクたることを知り得た。誰ならんかと其名をみれば、其半身像の下に「カーデナル、ジョン、ヘンリー、ニューマン」とあつた。わが好奇心は、此に充分に満足せしめられた。ニューマンの名をきくや久しく、其事蹟をよめることも多かりしも、其肖像を見しは、此時初めてなりしが。其容貌はわが身を失望せしめなかつた。其後オクスフォードに往き、彼が永く司牧せし、而て今も大學説

教の行はれ、「バムプトン講演」も行はる、聖マリヤ教會を訪ね、其眞摯率直の辯を振ひし教壇をみて、其面影を偲び、言ひ知れぬ感興を覺えた。

曩に築地の病院にありしとき、或タマキム監督が訪ねられ、我枕頭にありしニューマンが自筆の信仰歴史たる「アポロギヤ」をみて曰ふ「ニューマンは不思議な人格である。されど彼の最も輝ける生涯は英國教會に在りし間である」と云はれた。不思議な人格であるとは、其進退の變化の極端なりし意味にて、初は自由説に傾き、中頃公會主義復興の中心人物となり。後には遂に羅馬教會へ去つたからである。彼は不思議なる性格である。其行動に變化が多い、而して其變化



は極めて激烈である。其激烈なる變化は、皆良心の聲に忠實に従ひし結果にて。之が爲に、常に位置や、名譽を擲ちしのみならず、四面の攻撃を甘んじて受くるの剛勇を示し。更に人情に於て是よりも遙につらき、親友と生きたがら相断ち相分かれざるを得ざる苦痛をも甘んじて受けた。彼の如く良心の聲に、忠實なりし人は稀である。彼の如く主義に固く立ちし人は稀である。かれの如く確信を断行する爲に、何物をも犠牲にする人も稀である。英國教會より羅馬教會に轉せしとき、或者は彼を裏切者と罵つた、或者は彼を反逆者と嘲つた。されどかくまでも罵られ、嘲けられても、尙其良心の聲と、其確信を断行せし勇氣と決断力に至つては、實に天晴れ男子の行動

である。此點に於てはニューマンは歴史に稀に見る人格である。彼の「アポロギヤ」は心は既に羅馬教會にありながら、身尙英國教會に在りて、同志を連れ出さんとせしは不正直なり、不貞節なりとの誣言に、正直真摯なる彼は、堪へ得ずして、慨然として筆をとり、自家の信仰變遷の跡を忠實に記録せしものである。天下斯の如き真摯の書は、極めて稀である。

凡そ如何なる運動―特に宗教運動の大指導者たらんとする者に、必至なる資格の一は、神よりの使命を確信することである。之れおのれと神との間に直接に、かつ密接の關係あるを實現せるものなるを意味する。即ちおのれ特に神より一事を託せられたりと知己に感



激することである。此點よりせば、ニューマンは幼時より此資格を備へてあつた。彼は先づ幼時信仰にみち、情愛にとめる母よりして、此世に於て、最も緊切にして、かつ最も明白なることは、おのれとおのれの造主―神との關係なりと教へられた。今の心理學者が、成熟期と稱し、身體も精神も著しく急に發達し、同時に宗教的意識の勃興して「回心」に導くに至る、滿十五歳の頃に、ニューマンは頗る強き宗教的經驗を嘗めた。彼れは之を以て、彼の生涯の回心の時なりとし。かつ進んで、此頃よりして「自分は一生獨身仕主生涯を送るは神の聖旨であると思ふに至つた」と云ふて居る。

後年、彼は神の聖手が、不思議にも彼の生涯を指導して居るを明白に認め、病氣の故に歐洲に旅行せしとき、自身には一の重大なる使命が負はせられてあることを確信した。

かくて彼は其信仰生涯を通じて、おのれは神の聖手に導かれて、神よりの特殊の使命を果す爲に用ひられつゝありとの確信を失ひしことなかりしは明である。

一八〇一年の二月廿一日英國ロンドンの銀行家たりしニューマン家に、一子が生れた。ジョン、ヘンリー、ニューマンは即ち之れであつた。其母は佛國のユーゲノーの血統を有し、極端ならざるカル



ビン説を抱けるものにてニューマンは先づ此母よりして、此世には  
ひとりの眼に見えざるものあり、これは何時にても話を爲すことも  
出来るほどに、自分と最も親密なる關係を保ち、自分を愛したまふこ  
とは、自分に最も近き自分の両親にも勝り、自分の思も考へも悉く  
知り、聲を出さずとも、わが祈りを知りたまふものである』と教へられ  
た。

幼少の際、人が母より受くる感化は極く深刻にして、かつ永存的  
である。かくて敬虔の信念厚き母の膝より屢偉人物は出た。此にも  
其一例がある。此母によりてニューマンは聖書を愛讀することを教  
へられた。其の友人チ、ビ、モズレーの言ふ所によれば『彼は聖書全體

を暗誦せりと云ふも過言であるまい』とのことである。

かくて彼は情愛に富める両親と仲善き姉妹等の在る幸福なる家庭  
に、多感にして思深く、音楽と詩を愛する小供として成長したるが、  
七歳にて、アーリングと云へる所の一學校にジ、ニコラスと云ふ一  
長老の薫陶の下に學び。八年半在學の後、十六歳未滿にして、オク  
スフォード大學に來り。トリニチー校に入學し。千八百十八年、十  
七歳の時、競争試験に及第して、スカラシップを得た。彼れの性質  
は、内氣にして人前に出るを避る傾あり。従つて通常のオクスフォ  
ード大學生と同調に、日を送り得ざる傾があつた。されど彼の勉強  
は、實に驚くべきものにて、試験の前日々平均十二時間讀書した。



若し九時間より讀むひまのなかりしときは、翌日は十五時間讀書した」と自分で云ふて居る。然るに其成績は、尙満足でなかつた。之は大學生涯をあまりに、早くより初めし爲(キーブルも若かりしが)過勞に陥りしからである。

彼は七年間此スカラシップを持続せしが、當時牛津全校中最も學名の高かりしオリーエル校の名譽特待生の競争試験に應せんと考へた。此校のフェロー選舉は、屢人の意想外に出で、或時は第一流の合格者よりも、却て第二流のものを選りしことあり。ニューマンの場合にも、其論文は同校長及特待生等の注意を惹き、試験の終らざるに先ち、彼の身元と學歴を調査し初められた。

ニューマンは、一時は失望して、受験を止めんと思ひしも。母校の教師の奨励によりて、遂に終迄忍びしが。オリーエル校より、彼がフェローにあげられし通知の使の來りしときは、彼はバイオリンを奏して居つたが、傳言をきゝてのちも、其曲の終る迄奏し、やがて使の影の消えうするや否、此選舉の報を評判しつゝある、ブロード、ストリートの群集を押しわけて、オリーエル校へ馳けつけたとの逸話が今に残つてある。

ニューマンは、かくて當時「オクスフォード第一流の人物」たりしキーブル初め、其他ホーキンスや、ワトレー、後にビューシーとも相交るに至つた。



彼が此頃磨き上げんとせし點は、其學才であつた。傳へらるゝ所によれば、彼は毎日必ず拉典語の一詩を作れりとのことなるが。フエローとなりてのち、チユートアの仕事を爲し、其學生に大に愛好せられた。

一八二四年二十五歳にて、執事按手禮を領し、オクスフォードの聖クレメント教會の副牧師となり。翌年五月長老に昇進した。彼は司牧に關する高尚なる理想を有し、信者を戸毎に訪問し、其結果彼らの信任と愛好を受けた。彼はまた貧者の間に大に働いた。然も此間尙大學の教授の勤を果し、かつ評論や雜誌に執筆しつゝあつた。其説教も亦次第に人の心を惹くに至り、後日宗教運動の指導者たる

の準備を知らず識らずつくりつゝあつた。

彼の宗教思想に激變を來せしは、其自から言ふ所によれば此時代であつた。オーリエル校の「コンモン、ルーム」に於けるフエローらの、學者的にして、論理的に、而かも深き信念と責任を重んずる會話は、大に彼を感化し、訓練した。其交れる人々の性格の異りしだけ、受し感化も種々あつた。彼は後年之を追想して『神と人に對する謙遜と愛』に充てるビュイシーとの永き交友と、其模範より大に學ぶ所があつたと云ふて居る。彼は又聖マリア教會の牧師たりしホイキンスより、教理に關する要點に於て大に教へらるゝ所があつた。實はニューマンが自傳に謂ふが如く、彼の神學思想は、其幼少の頃より、公



會的と云ふよりは、むしろルーテル派、若くは福音派に傾いて居つたが、此頃より教義上次第に公會的になつてきた。彼れは其古參のフエローのワートレーが聖アルバン校の長となるや、其副校長として招かれ、一年止りしが。オリーエル校の公任助教に任せらるゝに及んで之を辭し。同時に聖クレメントの副牧師をも辭してしまつた。此職に在りし事六年間。  
彼は此新位置にあつて、學生に宗教的訓練を與ふるに大に盡力した。彼は單に學課を教ふるのみにて満足せず、其のみにては責任を充分に果たさずと思ひ。彼の指導の下に置かれし青年に、宗教的訓練を與へ、之を神に導くは、彼の使命の一と思ふた。

一八二七年、ニューマンは年二十七歳にして、大學の試験官に任せられ、翌年聖マリア教會の牧師となつた。凡そ人は一教會の司牧の任に當らんとするときは、之れ其人の生涯の一大事件にして、また最も嚴かなる時機である。此時に當ては、人は多少深刻なる感想なきを得ない。彼は其「アポロギヤ」に告白して曰ふ  
『わが身にとりては、之れ冬枯の後に、新春の光に接したるが如く。若し言ふを得べくば、わが身は穴居より出で來し心地がした。』  
彼は一八四一年まで此位置を保つた。  
此頃よりして、ニューマンは智的方面よりも、寧ろ心靈的の方面に益興味を覚え、其注意を拂ふやうなつた。之にはキープルの直接の



感化と、其弟子フロードを通じての間接の感化は、他の何人よりも、何等の書物よりも、與つて力あつた。公會の政治組織、其聖徒、其貞潔の模範、其痛悔と苦行修行、聖餐に於けるキリストの現臨等は、最も大膽に、最も力強く、フロードによりて言明せられてあつた。ニューマン自身も原始教會史の研究を初め、アリウス異端に關する書物をかいた。

やがてかく大學教授と教會と著作に全力全心を傾注しつゝありし彼の生涯に、一新時機をつくるべき時が來た。人の健康に限がある。其體力が心的激動に堪へ得る度を過すとき、健康の衰弱を來すは自然である。ニューマンも其健康の爲に、一時大學のつとめをやめて

保養するの必要を感じに至つた。

病氣は屢人の使命と大なる關係がある。病めるときに、人は平生激動の間に悟り得ざる神の聖旨を知り。平生多忙の際に聴き得ざる神の聲をきゝ得ることがある。而して之は場所を轉じて、新なる風光に接するとき。或は山を越ゆる間、或は海を渡る間に起ることが多い。ニューマンの場合も其一例である。

一八三二年冬十二月、彼は其友人二人と共に、長き外國旅行に上つた。リスボンより船出して、ジブラルタルに往き。そこよりマルタ島に赴き、更に地中海の島を訪ねて、伊太利のネーブルに入り。遂に史的聯想に富めるロマの都に入つた。彼は其自白録に云ふ



「過ぐる六年間の大學教授の激務と、文學的にしてかつ靜和なる交友の生涯に代ふるに。外國旅行と、圖り知るべからざる未來の運命を以てしてより。わが身は自づから、わが内心の變化と、更に大なる運命のわが身の上に落ち來らんとしつゝあるを感ぜざるを得なかつた。……」

地中海の諸島を訪ね、わが友人と羅馬にてわかれてのち。四月の終、わが身は唯ひとり、再びシ、リー島を訪ねて、六月の終に英國に歸つた。

異國の生活の不思議なるをみて、わが身は益わが孤獨と寂寞とを覺えた。歴史的の故蹟と美はしき風光とは、人物よりも風俗よ

りもわが身に最も多くの興味を興へた。……

かくて、わが身は益々わが孤獨を感ずるに至つた。わが心にかゝりしことは、英國の事のみなるに、英國よりのたよりは稀れであつた。當時愛蘭監督教區沒收條例は國會にて進行中にて、わが心をいたくいためた。……自由派の成功は、わが心を内に燃えしめた。……

旅の空に、わが身ひとり残されしとき。救は多數によらで、少數者によりて成就せらる、即ち幾多の團體によりてにあらず、幾多の個人によりてなりとの念、わが心に生じて來た。……かくて我身は一の天職を有するを自覺し初めた。……ロマにてワイズマンと



會見せしとき。彼れはわが身にロマに來訪せよと云ふた。其時余は  
 嚴かに『われは英國にて爲すべき一の仕事を有す』と答へた。わが身  
 はすぐシ、リトへ往つたが、此の念は益強くなつて來た。内地に深  
 く入り込みしとき、レオンホテルにて熱病に罹つた。わが僕はわが  
 身は到底たすかるまじと考へ、遺言を求めた。彼の求むるが如く、  
 之を與へた。されど、余は『われは死なゝい』と云ひ。再び『われは死  
 なゝい。われは光に對して罪を犯したことがないから。われは光  
 に對して罪を犯したことがないから』とくりかへした。此意味は今  
 に至る迄わが身に解せられない。』(アボロギヤより譯出)  
 神が重大なる使命を、人に負さしめんとしたまふや。飄々乎とし

て浮世を軽く渡る輕薄兒を撰びたまはず、又得意满心自負の念強き  
 人をも選びたまはない。戦々競々、おのれのよわきと足らざるを之れ  
 憂ふる眞摯なる者の心の戸を叩きたまふ。かくの如くしておのがよ  
 わき理由よりして、幾度も辭せしモーセも遂に神によりて起された。  
 ニューマンが神の使命を確信し、われわが本國に於て主の爲に成す  
 べきつとめありと悟り。われ死すべからず、生きて尙戦はざるべから  
 ずと考へしは、大學の講堂にて、得意に講義せるときにあらずして。  
 却て異郷の旅の空に、其心さびしさを感せる時であつた。ニューマ  
 ンは尙語をつゝけて曰ふ

『其より漸くカストロジョパニへ出で來り、そこに約三週間滯



在保養した。五月の終に三日路を経て、バラーモに着。其月の廿六日なりしか、廿七日なりしか、朝早く宿より出發せんとするに當り、わが身は床の上に座して激しく泣いた。わが身を看護しつゝありし従僕は、何事ありてか、かくまでは心を痛めさするぞとたづねた。わが身は唯「われは英國に於て爲べきの一事あり」と答へ得たのみであつた。(同上)

ニューマンの眞摯なる筆に成れる自傳「アポロギヤ」を讀て、此に至れば誰も暫く眼を閉ちて一考せざるを得ない。異卿の空に死するばかりの病に罹かる。之れたしかに人生の一大試練である。而かもかゝるごき神の聖手は人に觸れ、其一代の運命は決せらる。曉に醒

めて、ひとり床の上に坐して泣いた、男泣に泣た。卅四歳の男が聲をあげて泣くには、深き意義がない筈はない。ニューマンは其故を問はれて「われは英國に於て爲すべきの一事がある」と云ひしのみ、其以上の理由を言ふて居ない。其以上は恐らく人に告ぐるにはあまりに深嚴であつたからである。もしわれらの主キリストが、われ飲むべきの杯あり、其事の遂げらるゝ迄にわが苦は如何ばかりぞやと仰せられし意味が幾分にても解せらるゝとせば。それと之とは、固より比ぶべきにあらずとするも、ニューマンが其使命を思ふて、ひとり聲をあげて泣きし理由もおぼろげながら解せらるゝである。大なる使命には大なる堅忍を要する。之を果す爲に如何なる犠牲と



一九四  
克己を値するかを思ふとき、人は此に一種の苦さを覺ゆる。神の命重し、われよわくとも起たざるべからず。願くは金雀花の木の下にて、われ死なんと願ふとも。神はイスラヘルの預言者を追ひ立て「起ちて食へ。汝の道は遠ければなり」とのたまふた。ニューマンの泣きしは、かゝる場合であつたからではなかるふ乎。一事は明かである。かくおのが運命を想ふて、男泣に泣ほごの眞摯なる熱誠あらずば、如何にしても神の特殊の使命に當ることが出来ないことである。一青年教役者が飄然として任地に、心軽く赴くを見て、老牧師は彼の前途を危んだと云ふ話もある。ニューマンの以後の生涯は、此の旅の曉の男泣によりて、預言せられて居る。彼は尙進んで云ふ

「わが歸心矢の如くである。されど便船がない爲、バラモに三週間逗留せざるを得なかつた……遂にマルセーユ行の蜜柑船に便乗することゝなつた。此舟中にて後に人口に噂するに至りし、めぐみあるひかりよ」を書いたのである。……

みめぐみあるひかりよ　　ひはくれ  
わがいへはいとどほし　　さびしき  
やみのなかにまよへる　　われをみちびきたまへ  
とほくをまでみんことを　　のぞまじ  
主よわがよわきあしを　　まもりて  
ゆくてのひとあゆみを　　しめしたまはたりなん



われらは此歌をよく記憶して居る。而かも之はニューマンの作であることが氣付かずに歌ふことが多い。又彼が如何なる場合に、如何にして、何處にて作つたかを考へることは更に少ない。

されど之れ異郷孤島の病床に、靜かに、母國教會の運命を考へ。更に神がおのれを、其用に立てんとしたまふを思ひ、而かも其事の遂げらるゝまでに、飲み干すべき杯の苦がさを察しつゝ。地中海上、板一枚下は底知れぬ水の上に、身を小さき蜜柑船に托して、ゆくての運命の定かならぬときに、心の最奥より叫び出でし、暗の裡に光を求むる眞のあえぎなるを思ふとき。之を歌ふものゝ心も、自づから動かされざるを得ない。何故となれば小さながらわれらの信仰生

涯にも、此歌を心より叫ぶが如き場合は少なくないからである。彼は更に其話をつづけて曰ふ

「遂にマルセーユに着して、すぐ英國に出立せんと思ふたが。旅のつかれのあまりに激きに、遂にリオンにて數日の間休息した。

いよゝ出立しては、晝夜急行(パリにて已むを得ず待合せし外)英國に歸り母の許についた。わが弟は其數時前ベルシヤより歸着した所であつた。

其次の日曜日六月十四日に、キープル氏は大學の教壇にて『國民的背教』を説教した。わが身は、其後此日を以て一八三三年の宗教運動(オクスフォード運動)の端緒と考へて來た。』(同上)



ニューマンが旅の空にて苦思せしも理であつた。見よ、歸後數日ならざるに、後には全英教會を震撼すべき大運動は着手せらるべくあつたのである。而してニューマン自身は其指導者の一人となるべくあつたのである。

之よりニューマンの生涯は新時期に入る。

二

△英國教會の一危機ニニューマンの歸國△「牛津運動」開始△「時世用トラクト」最初數號の執筆ニ其特色△其主張△其受けし反對△ビュシーの加擔△ニューマンの説教の感化力ニ其特色△グラッドストーンのニューマンの説教評△其風采シーサーに似たり△其個人的感化△運動の二武器△非難の初△當時の心事△彼の幼時の教養ニ其信仰の立場との關係△疑雲現はる△英國教會「中間道」説を危み初む△心的動搖の初△引退の念

△リツルモア僧舎建立の計畫△トラクト第九十號出づ△大學側よりの攻撃ニ議誅△ニューマンの英國教會に對する失望の初—第一打撃△首領の位地亡す△アリウス異端の研究—第二打撃△諸監督の公式的議誅—第三打撃△英國教會辭去の近因△エルサレム監督教區新設立—第四打撃△ニューマンの英國教會生涯の「終の始」△リツルモアへ引退△最後の告別説教△妹へ與へし書△聖マリア司牧辭職の影響△彼の説教の功果

シ、リー島に於ける長き不快と熱病、さては地中海上の孤獨の航行に、本國の事氣にかゝりしニューマンは、恰も英國教會の一危機に上陸した。即ち之れ長き間、教會に對して人々が抱きし憂が、遂に其頂點に達せし時。教會の敵が、久しく計畫し來りし時機の熟せし時。而して其味方も、此教會危急存亡の時に當つて、爲す所を知らざりし時にて。大膽に覺悟せし少數志士が、正に奮起せざるべか



らざる時であつた。

キープルの大學説教によりて、『オクスフォード運動』は其宣戰を爲し。次で有名なるハードレーの有志會合の結果、『時世用小冊子』の發行となり。更に一個の有志團體は編成せられ。又カンタベリー大監督へ、時世の危機に關して一篇の上申書を呈せんとの企ても起つた。此時世用トラクトを出すに關しては、有志の間には其結果如何あるべきと稍躊躇せしものもありしが。ニューマンは思切つて、キープルとフロードの同意を得て、最初の數號を執筆發刊した。加之地方の聖職を訪問し、又書面を四方に出して、其主旨に賛同を求め爲に奔走し、遂に彼は此肝要なる新運動の首領の地位に立つた。

旅行中に感したる孤獨の念や、不安の思は、いつしか消え亡せて。之ぞ神が英國教會に、わが身を要したまふ所以なりしと悟つて。元氣横溢、意氣天下を呑み、勝算胸中に歴々として居つた。かれ自らも、此時機ほど彼の生涯中幸福なりし時はなかつたと云ふて居る。其「アポロギヤ」に自白する所によれば

『わが身は、曾てわが夢想せし事業、緊急にしてかつ洪大なる使命を果さんとしつゝありとの念が強くあつた。此運動に關して、無上の確信を抱いて居つた。われらは教會初代の教師によりて、常に主張せられ、英國教會の法典に記載せられ。英國教會神學者によりて證明せられし、原始基督教を主張しつゝあつたのである。』







るに至つた。ビュイシーは其後「洗禮」に關して大部の著を出し、更に「教會師父叢書」の初號を出した。之より以後、ビュイシーはキープルに於けるが如く、ニューマンの親友にして相談相手となつた。

一八二八年頃より、オクスフォードの聖マリア教會に於けるニューマンの説教は驚くべき感化を與へて居つた。ゼームス、モズレーの記す所によれば、彼れの説教は聽者の感情や、觀念や、事物を觀察する態度にまで悉く觸れた。彼れが人の心の奥深く入りて、聴くもの、悲や、愁や、艱や、誘や、失望を突止め。又聴きし當時はさほごにも思はざりし事にて、後に或機會に觸れて、之れを思ひ出して力となり、慰めとなるやうな事を話した。

「彼は道徳上若くは心靈上の舊き眞理、すべての信者の皆よく知れるものにてありながら尙忘れて居りしものを、新しき思ひ掛ない方面より語り出して、之に新生命を與ふる力を有て居た。たとへば「靈魂の個人性」、「戰は勝利の條件」、「教會は孤獨者のホーム」などの題にて、説教せるごき。如何に舊き眞理が、舊來全く氣付かざりし意味にてあらはれて來たりしが。今迄之を氣付かずに看過せし聽衆の心の秘密にふれて、戰慄せしめた。哲學者が幾卷の書物に書き盡せない幽玄の眞理を、最も清純なる二三の英語中に言ふくめた』(「シャープ教授の話」)

グラットストンも、ニューマンの説教を常にきゝし人なるが、一八八七年ロンドンの「シチー、テムブル」に於ける演説中に之れを



評して

「聲調の變化はあまりなかつた。手眞似に至つては、皆無であつた。彼は常に其説教を讀んだ。其眼は常に原稿に注がれて居た。かくては説教の効果は、覺束ないと思はれるかもしれないが、説教者全體を見ねばならぬ。説教には、かれの人格が堅く印せられ、其聲の調は、音樂的に美しく、其説教者のおもかげは、口調と風采が極めてよく調和して、以上の如き説教體の欠點ありしにも拘らず、極めて引心的であつた。」

と云ふた。彼の親友フロードは、彼の風采を評して、ジュリアス、シザーに酷似して居る。兩者とも口元は特別にて、常に外貌の似た

るのみならず、其威嚴人を壓せんとする性格、聰明なる智見に加ふるに、最も人を引着せしむる柔和とやさしきと、思と志の始終一貫せるを、一身に結合せりと云ふて居る。

ニューマンは、彼の説教を聽かんとて來るもの、みならず、彼の許に來るものに對して、個人的交際に於て、直接に感化を與ふることの必要なを認めた。されど彼の感化は、殊に修飾してにあらす、其胸襟を披いて、共に語る不用意の間に出で來つた。「首領者の地位も、彼が求めしにはあらで、彼でなければならなかつたからである」とデーモン、チャーチは言ふ。

かくてトラクトと説教とは、共に運動の傳播を助けた。人々はト



ラクトを讀むと共に説教をきく。而して其説教に於て、トラクトに論せられし教義や主張の意味と理由を解することを得た。

トラクトの進行と共に、ニューマンは、其反對派よりして、ロマ主義を抱けりとの非難を受けた。彼は之に答ふる爲に『ロマ主義と一般プロテスタント主義との關係よりみたる教會の預言者の任務』と題する講演を爲し。後に之を『中間道』(The via media)と題して出版した。之は英國教會の位置を神學上より、系統的に言明せるものであつた。傳ふる所によれば、ニューマンの此頃の心事は、恰も航海長が上陸地點の安全を圖らんとて、計深鐘を投じつゝ、ある有様であつた。『鐘は二三分間毎に水中に投げられ、船員は其結果如何を氣遣はしげ

に、待てる有様であつた』

此に注意すべきは、ニューマンは其幼少の時よりピュトシートやキブルの如く、英國教會の立場に關して、確固たる信仰の裡に養はれて來なかつたことである。彼れの中間道説は、多くの人々によつて、之れ單に紙上の空論にして、陋劣なる讓歩なりと批評せられた。されど當時尙ほ彼は英國教會を愛するの誠心は、毫も變はらなかつた。

然るに今迄明なりし水平線上に、一片の雲がみえ初めた。次第に大に擴らんとするやうになつた。千八百三十九年の夏、彼は一意論者(キリストには一意のみ神人の二意にあらずとあるもの)の論争の歴



史を研究せるが。其結果、英國教會の位地に關して、疑が生し初め

彼の言をかりて云へば、『壁間に手の影がみえた』彼は『幽霊を見たやうな人となつた』一度幽霊をみしものは、曾て之をみしことなきやうな心地になれない』と云ふて居る。之がニューマンが苦き心の戦の初めであつた。

かくの如くにして英國教會は『中間道』であるとの説は、敗れ終つた如くなつた。よし羅馬教會は、實際上種々の弊害と誤謬に充てりと思ひながらも、一旦かく疑起りてのちは、以前の如くロマ教會に對して、正面より攻撃するの鋒先が鈍るやうになつた。彼は靜想の時

を欲するやうになつた。更に聖マリヤ教會の司牧職をすら辭し。其教會の分教會とも云ふべき、オクスフォードより二哩ほど離れしリツルモアに、彼が一八三五年に立てし質素なる小教會に、田舎人を相手に引退せんかとも思ふやうになつた。

此に注意すべきことは、ニューマンはかく一方にオクスフォードに於て、學者及學生の間に、心靈上の指導者として、かつ公會の信仰の教師として成効し、大なる感化を與へ得しのみならず、又他方に於て田舎の百姓や勞働者の好牧師たり得たことである。

今や疑其の心中に生じ、内外の苦悶彼の身に迫り來れるに及んで。彼は其心を整ふる爲に、暫く學府を去つて、閑村に引退せんと望む



やうになつた。

一八四〇年頃より疑ひが起り初めた。されど尙英國教會の使徒繼承を疑はなかつた。其年の五月六月には彼は、此リッセルモアの閑村に一個の僧舎の如きものを建て、禮拜堂と、圖書館と僧房——各僧房は三室に別れ、一は書齋、二は寢室、三は冷水浴場——よりなれるものを作らんとすの計畫に苦心して居つた。此間彼は少年に教會音楽を教へ、又黙想と宗教的修行に費した。

是より先き、オクスフォード運動の批評家と賛成家の中には、英國教會の慣例を、羅馬教會の主張を認ざる範圍に於て、正當に公會主義風に注釋するの要あるを認め初めた。

かくて有名なる「トトラクト第九十號」が出るやうになつた。之は「聖公會大綱」を公會主義の立場より注釋したのであつて、二月廿七日に出刊せられた。此書一たび出るや、オクスフォードは、批評と議論を以て之を迎へず、直に「恐惶と怒」を以て之に對した。

四人の大學助教は、かゝる羅馬的見解をさる記者は、大學の職員たるべからずと非難した。一週間の後、大學各校長會議はニューマンの辨解を聴かずして、此トトラクトを議誅した。之は不正の手續であつた。彼は禮義を厚ふして、其立場を辯解し。更に彼の監督にも然せしが、此事はニューマンにとりて、實に意外であつた。彼が大綱を正當に解せしとせし所は大學及び教會の官憲の容るゝ所とな



失望の初

二二四

首領者の地位亡す

らざりしに驚いた。之も亦彼をして英國教會に失望せしむる一素因となつた。彼は此時、之が爲に、オクスフォード運動に於ける首領としての位置は、亡せ終つたと覺悟した。自白して曰ふ

『わが身は此時明に此運動に於けるわが位置は亡せ、わが社會に於ける信用は落ち、わが職務も、はや是迄なりと思ふた。……オクスフォード監督に送りし書面の終に、此運動に於けるわが位置を辭し終つた。』

之れ彼がうけし第一の打撃であつた。

彼は閑村リツルモアに退いて、アタナシアスの書の翻譯に従事し初めし時、先の「幽霊」は、再びあらはれて來た。之はアリウス異端の

アリウス異端研究  
其結果

英國教會  
去の直  
接原因

第四講 ニューマン

二二五

歴史研究の結果である。彼は「アリウスはプロテスタントで、アリウス派は英國教會でロマが今在るが如き位置にありしを見た。中間道は此兩者の間に立てるもの、執る立場なりと思ふた。此事に關してはニューマンは餘程神經過敏であつたを免かれないやうにみゆる。

之れ第二の打撃であつた

第三の打撃は續いて來た。之は諸監督よりの公式的の譴責である。ニューマンは之を以て、英國教會が「トラクト」の傳ふる教説を議誅排斥せるものと解した。之れ彼をして、後英國教會を去るに至らしめし、最も強き原因となつた。

されど此にも彼れは或特殊の時代の監督の見る所は、必ずしも教



會の正統派信仰と同一視すべからざるは、歴史の示す所であるをわすれて居た。ゼューシーは曾て曰く「ニューマンは監督を頼みとして居た。而かも監督らは彼に打撃を加へた。キールブルとわれとは教會を頼みとした」と。之れニーマンと他の二人との相違の點である。第四の打撃は、エルサレムに監督教區を設くることになつたことである。之は獨逸のルーテル派と、一種の讓歩的の妥協によりて英國教會より一監督を彼處に送るとのことにて。ニューマンには、之を以て、英國教會の果して正統的なるやを疑ひ危む近因となり。彼の英國教會生涯の「終の始」と爲るに至つた。彼は曰ふ

「一八四一年の暮より、わが身はわが英國教會員としての臨終にあつた、よし之を知るに至りしは徐々ではあつたが」。

彼はもはや英國教會を見るに、又以前の如き同一の信任を以てする能はざるに至つた。かくて彼は、極めて苦しき不安懷疑の時日を送りつゝあつた。從來彼が英國教會の公會的正統の立場とし來りしものは、林檎の實の一つ又一つと、枝より落つるが如く、漸を追ふて落ち往くをみた。されど尙羅馬教會に往かんと最後の決心はなかつた。一八四二年二月、彼は書物と手廻荷物を携へて、リツルモアへ引退し。牛津には聖マリア教會の爲に、木曜より日曜日にかけて滞在することゝなつた。此引退も亦少なからず人の心に暗鬼を生せしめ



た。

翌年八月、此閑村に居つた彼の同志の一人は、羅馬教會に轉籍した。かくて彼は、何とか身の立場を明にせざるべからざるに至り。もはや聖職の地位を保つ能はず、平信徒に退かんかとも考へ、又聖マリヤ教會とアリツルモアの牧師を辭せんと決心した。彼は最後の告別説教を、其年の九月十七日、聖マリヤ教會にて。其次の日曜日に、アリツルモアにて爲した。此アリツルモアに於ける説教ほど、苦悶に充てるものは、未だ曾て何らの説教者より誰も聞きしことなきほどであつたと稱せられて居る。

此少し以前に彼の妹ゼームス、モズレー夫人にかき送りし書は、

當時の彼の心事を示して居る。

羅馬教會は眞正の教會なりとのことが、人の心に與ふる感想と其結果は量り知ること難く候。勿論之は最も革命的にして、從て最も強迫的に、かつ激變的の確信に候。それ故かゝる確信の下に進退を決すべからず候。そはかゝる感情の興奮せる場合には、人は其確信が、果して根據強固のものなりや否を靜平に判すること難き故に候。……御身をして憂へしむることは、わが最も心苦く覺ゆる所に候。されど如何にわが身が餘儀なくせられつゝあるかは、御身の知る所に候。御身はわが身が以前に勝りて、わが心の底より、御身を愛すること減せしと思ふことなかるべしと存候。



ニューマンが聖マリヤ教會司牧辭任は、オクスフォードを畏れ驚かした。人死して、其人の徳が慕はしくなるが如く、深き注意と興味を以てきかれしニューマンの聲、再び聖マリヤ教會に聞えずなりてのちは、彼の説教の功果の如何に多く、かつ大なりしかは、しみじみと人の心に感ぜらるゝやうになつた。彼の説教の効果に就ては、當時公にせられし左の評語をみても、其一般は察せらるゝ。

『恐らく今日の宗教思想界の傾向を嚮導し、之に活氣を興へ、之を堅固ならしめしものは、彼の説教に勝るものはあるまい。彼の神學説と同意見を有する者にも、又全く反對の見地を占めるものにも、彼の説教は同様の勢力があつた。彼の説教は、宗教上の問題に對する

態度を、全く一變せしめた。又彼の説教は、今の世の大家の手に成りし最上の英語の好範例の一である。彼の説教の如き、深刻なる確信と、其一貫せる目的が、文學上の獨創力と完美なる措辭と相結べるものは、容易に何處にも聽くことは出來ない』。

又或一人は謂ふ

『余は今日迄かくの如く深く印象を興ふる人物を見しことはない。余は屢私かに彼に面會した。余は彼の教會には、日曜日毎に列した。彼は陰險にして、其目的をかくし、不知不識の間に、其弟子をかれの企畫中に陥れんとするなりと評判せられてあつた。されど事實は之と全く反對にて、彼ほど透明の人は他に見ない。彼は其信する所



は眞理なりと説いた。彼は其信仰は那邊に彼を導き到るかを知らなかつた。

ニユーマンの辭任より二十五年の後、當時を回想せるもの、語に『ニユーマンの聲再び聞へずなりしとき、牛津が感せし一種言ふべからざる寂寞と、凄きまでに覺えし静止の状況は。二十五年後の今日、尙眼前に彷彿として來る。當時の人々の感せし所は、恰も廣大なる大聖堂に、夜靜に跪きていのれるとき、今迄莊嚴の調にて鳴りつけ居し大堂鐘が、突然鳴り止みしが如きを覺えた。彼の去りて後、幾多の大説教者の聲は響きしも、彼の如く、人の魂の深底まで立ち入る如き説教は、復再び聽きしことはない。』

三

△不定未決の煩悶期△妹の書と彼の答△轉籍前の彼の苦衷△決行せし二事(一)羅馬教會攻撃取消(二)聖マリア教會辭任△教會發達に關する論文△轉籍決心△牛津辭去感慨△ロンドンの聖ペテロチャペルにニユーマンとの關係△轉籍の影響△グラツドストーンの嘆△爾後のトラクト派△キープル等の態度△轉籍後のニユーマン△英國教會非難△カーデナルを爲る△晩年△其死△人物概評

ニユーマンはかくて一八四三年の殘と、其翌年の大部分には、全く引退の生涯を送りつゝあつたが。其心は羅馬教會へ傾きつゝも、尙英國教會に有利の點の發見せらるゝやもしらずと心待に待ちつゝあつた。

彼のかゝる心苦き不定未決の状態を見し彼の妹が、其年三月に書きし書は、實に讀む者をして、そゞろに憐みを催さしむる。



「之をきくは、恰もわが親き友が、致命症に罹れりと告げられしが如き心地せられ候。小妹はわが身を窮迫し來る此如何ともすべからざる出來事に對しては、もはや堪へ得ず相成候。其結果如何なるべき、わが身は知り得ず候。ア、わが愛するジョンよ。其結果として、多くの人々に混雜と沮喪を與ふるに相違なかるべき、御身の進退を決するによく／＼考へられ候や。かく言へば、御身の答は、必ず個人の救の爲には何事も辭すべからずと云ふにあるは、わが身はよく知り居り候。之れわが身も同感に候へども：御身の如き意見を抱き得ず、却て之れ大なる失策なりとの外、考へ得ざるわれらの思は如何に候べき。」

之に對する彼の返事も等しくあはれである。

「わが身は、わが愛せるものらを憂へしめ。わが教へ導きしものらを、困惑せしめつゝあり候。わが身はわが知らざる所、また期待すること、極めて少き所に往かんとしつゝあり候。わが身はわれ自身を無籍者となしつゝあり候。而かもわがこの齡に於て。ア、之れ避くべからざる必要の外、何の爲にてあるべき……わが斷へすいのる所は、もし此事にしてわが幻想なりとせば、神が、わが惑を解きて、わが身の爲すことを示したまはんことに候。わが望は、今は神を措いて、他に何物も候べき……若し神の聖旨がわが執れる方針に異るとせば、願くは神、之をわが身に告げ、わが身



亦靜に耳を之に傾け得んことを。

ニューマンが英國教會を去りて、羅馬教會に行きしを嚴しく非難せんとするものにとりては。かゝる書面はたしかに、多少彼の心事を憐察せしむる助となるであらふ。疑もなく此兩三年は彼にとりて、人の稀に經驗する、最も苦き心的並に靈的煩悶の時代であつた。誰にても彼の立場を信實に思ひやるものは、彼が非難されしが如く、彼を以て反逆者なり、疑惑の傳播者なりと酷評することが出来ないであらふ。況んや、又英國教會にありて、其權威と教説を破壊せんと企てし者とせんとするに於てをや。彼ほど良心の聲に従順ならんとし、自家の主義に忠實ならんとつとめしものは稀である。

かくて彼は、一旦其持説は、英國公會の聖職として、教ゆる能はざることを悟るや。斷然此年に二個の事を決行した。即ち其一は從來彼が羅馬教會に對して發言せる攻撃の言を取消したこと。其二は牛津聖マリア教會の牧師を辭したことである。

彼は、此最後の決心を爲す前、其の立場と意見を明かにする爲に教會の發達に關する有名なる論文を書いた。羅馬教會の辨證家は、原始的基督教は彼等の教會にあり、異端とプロテスタントは、之より脱出せるものなりと云ふ。ニューマンの論文は、之に對して一個の新説を出して。後世の羅馬説と、原始傳承との間に存する齟齬を調和せんと試みたのである。



ニューマンの説は、ダーウインの進化説の先鋒なりしと、イリン  
グウォース博士は云ふて居る。(義)「三位一體の教」されど此にわれらの注  
意せざるべからざることがある。外ではない。神の默示が、移りゆ  
く世の思潮に應ずる爲に必至なる發達と、「聖徒に一たび傳へられし  
信仰の途」に附加せしドラマや式典とを區別せねばならぬことである。  
オクスフォードの傳説によれば、ニューマンは一月又一月と、月を  
重ねて此論文を草し往く間に。其身は日に月に瘠せゆき、其頬の肉  
は次第に落ちて、其顔は益透き通れるが如くなつたが、遂に最後の  
決心をなせしとき、今に及んで、もはや何を苦んで轉籍を躊躇すべ  
きぞとペンを擲つたと云ふことである。

かくて十月八日、神父ドミニックと會見して、羅馬教會にうけら  
るべきや否やに關して、打合を爲した。  
久しく住み馴れて、多くの聯想に充ち、多くの親しき友ある牛津  
を去らんとするに當りて、彼が心中感慨如何に深かりしかは、其自  
白録によりて察せらる。曰く  
『わが身は、一八四六年、二月二十三日、月曜日に牛津を去つた。  
……多くの友人は、最後の別れを告げに來た。ビューシー博士も、  
わが身と告別せんとて來られた……わが舊師オーグル博士は、此  
方より訪た。わが身になつかしき三一大學。わが新入生時代に住  
たりし室の壁には、鳶生ひからみてあつたが。之はわが生涯の死



まで住むしるしと常に思ひ居たのである。二十三日に牛津を去つた。其後復再び來らず。唯汽車の窓より、遙か向ふに大學のチャペルの幾多の尖塔を眺めたのみである。

と住み馴れし學府、説教し馴れし教壇の在る所を後にして、再び之を見るまじく落ち往く人の心根は、如何にもあはれである。

ロンドンのバツキンハム宮殿(居皇)より程遠からぬ所に、皇室の馬寮がある。其筋向に一のチャペルがある。聖彼得チャペルと言ふ。昔

は皇室附の奴婢が、禮拜に參列した所であると云ふことなるが。其牧師ウツド長老の(大阪桃山學)許に、先年わが身は暫く客たりしが。

萬國聖公會協議大會の最終の日の朝。日本の代表者八人の爲に、特

轉籍の影

に聖餐式は、今井長老司式、ウツド長老の補式にて行はれ。式後朝食を堂後の一室にて共にした。此チャペルこそニューマンが、羅馬轉籍前に、英國教會に於ける最後の聖餐をうけし教會にて、當時グラッドストーンも居つたことである。

勿論ニューマンの轉籍は、雷にトラクト派のみならず、英國教會にとりて、大なる打撃であつたに相違ない。彼の如く學才と人望と感化力を有し。有力なる首領として、其旗下に多數の同志をあつめ。信仰の戦に凱歌勇しく進めるものが。突然敵の軍門に降れるが如きさまを呈せしとき。折角從來苦心努力して、辨證せしことの一切無効に歸せしのみならず、却て之を粉碎するに至れる結果は、實に慘



憚たるものなきを得なかつた。

グラッドストーンの如きは『此事の與へし悪き影響は、決して拭はれない』と嘆じた。かくて彼を柱ごもし、杖ごも頼みし者、又はトラクト派の爲に盡瘁せしもの、中、或る者は之が爲に後退せるものあり、或る者は冷淡となれるものあり。更に極端に趨りて、嘗に公會主義を失へるのみならず、基督教主義をすら棄つるに至れるものも生じ。彼の幕下の年少なるものは、多く彼の跡を追ふて、羅馬教會へ轉籍した。爾後數年間、トラクト派の形勢は、恰も今迄武勇絶倫なりし一隊が、其の隊長を突然失ふてのちは。之れを指揮するものなく、右往左行、其の方向に迷ひ、前途の見込も確かならざるが如き

爾後の  
ラクト派

有様となつた。

されどキープルとビューシー及び其他の首領チャーチ并にゼームス、モズレー等に至つては、さる狼狽はなかつた。よし曾てわが靈のホームなりし所は、荒の爲に今は多少攪き亂されたりとするも。一度住みしホームは尙ほわがホームである。彼れらは断然として男らしく踏み止つた。かゝる英教會の危急存亡の一危機に際して、是等首領が毅然として、非難、攻撃、失心、沮喪、誤解、騒亂の間に立て動かざりしは、大に多とすべきである。されど此苦がき經驗は、トラクト派のものに教ゆるに。一人の大首領にあまり無雜作に信賴するは、危険なることを以てした。同時に、さなきだに此のトラク

キープル  
等の態度



ト派の運動を以て、羅馬化的傾向ありとして、猜忌の眼を以て眺め  
來し敵に、其疑を正當なりと考がへしむる機會を與へた。かくて彼  
らをして、『中間道』は實際存在する能はず、羅馬教會か、然らずば  
ロテスタントか、二極端のいづれか一を擇ばざるべからずとは、眞  
なりと思はしめた。

此事ありて數年間、英國に於ける公會主義の發展の妨げられしは、  
否むことは出来ない。

一八四五年十一月、オスコットに於いて、カーデナルワイズマ  
ンの忠告にて堅信せられ、羅馬教會に入りてのち、ニューマンは一  
八四六年十月に羅馬に赴むき、短時日の檢試の後、司祭に按手せら

れた。

翌年の暮に歸國し、バーミンハムに説教場をたて。上流のみなら  
ず、下等社會の者の間にも働き。一八四九年コレラの流行のとき、  
彼れは病者見舞の爲に、時間と勞力ををさへげて惜まなかつたが。  
轉籍後、彼れは其の説教と著書に於いて、英國教會の弱點を指摘す  
るに屢其度を過ごせし觀があつた。後一時ニューマンはロマ教會に  
快らすして、英國教會に復歸すとの風説ありしが。彼は之を強く否  
認し、全教會に入りてのち、一刻たりとも之を悔みしことなく、其  
禮拜、其戒律、其教説に、無上の満足を有すると言明してのち。  
『余は此に衷心より、絶對なる内部の確信と全意を以つて。プロテ



スタント主義は、此世にあり得るあらゆる宗教中最も恐懼すべきものにして。英國教會の禮拜式は、之を思ふだに余をして身振ひせしめ、聖公會大綱は余を戦慄せしむと云ふを躊躇しない。英國教會に復歸せよと。否。「網既に破れたり。而してわれらは救ひ出されぬ」。余は此の老年に於て。(手柔く云ふも)「密と乳の流るゝ地」をすて、「混雜の邑、奴隸の家」に還るとせば、之にも勝れる愚者は他にあらざるべし。』

設令一旦轉籍せしとは云へ、其生れて育ちし教會に對して、かくまでに激語せずとよかるべしと思はる。後年に至りて、其調は稍緩和となつた。

されど彼は、其死に至るまで、英語聖書を愛讀し、其言語の美を賞して云ふに

『英語聖書は、わが身に決して忘るゝ能はざる音樂の如くにのこり。教會の鐘の響の如くに、生きのこつて居る。』

又彼は英國の大聖堂の音樂を聽くを好み、ロンドンに來ると、毎に聖保羅大聖堂に往つた。

一八七九年、法王レオ十三世の即位するや、ニューマンは「カーデナル」に推舉せられ。其の就職の爲にロマに赴むいたが。其就任説教に於て、彼の畢生の目的は「宗教に於ける自由主義」、即ち「宗教には何等積極的眞理あることなし」とし。信經は如何なる種類のものにて



よしとする「ことに反対するのであると云ふた。

彼が轉籍の爲に、英國教會が蒙れる損害は、尠なからざりしも、彼が聖公會信仰の根本要義を辨證し、強固にせし功は没すると出來ない。されば羅馬教會に於ける此の榮譽ある高位に登せられしとき、會て聖公會の大人物たりしものが、かくまでに名譽をうけしを皆よろこんだ。

彼の在學在職せし牛津大學の「トリニチー」及「オーリエル」二校も、彼を名譽職員として、其社交に加はり來るをよろこび迎へた。彼の晩年は、比較的靜平で沈着と威嚴に充ちて居つた。

此間私交に於ては、彼に來り接するものに大に愛好せられつゝあ

つた。其一友の言ふに「彼は實に無上の能辯の談話家なりしが、少しも傲岸の風は見えなかつた」。又他のものは、彼の「透徹せる人格」と、其「優雅と性情の基督教的融和」を賞めた。又彼の死するや、一人は彼の擧作を賞して「友に對して意見を發表するに當りても、極めて自然に、新鮮にかつ自由にして何等形式に囚はるゝが如きことなかりし」と云ふた。彼は滑稽に富み、又反語を用ふるに頗る妙を得て居た。彼は實に同感のものをして、最も親密なる交情に入らしめ得る人であつた。彼が自から「最も親密にして最も親愛なる友情」をアール、エチ、フロードと保ちしも、之が爲である。二十七年間交友を續げしジョン、ウイリアム、ボーデンの死するや、彼は「わが身は彼の棺側



に立ちて、激しく泣いた。彼死してのち、真理の途は何れにありや。神を喜ばしたてまつり、又わが爲すべき分を爲す途はいづれにありやに就て、わが身を暗黒中に置き去りたればなり」と書いた。やかで此大なるかつ變化多き生涯の終りが来た。一八九〇年少時の病氣の後、彼は八月十一日九十歳にて此世を去た。其遺骸はバーミンガムの説教所に、二十四時間据え置かれしが。其間に二萬人餘も來り弔ふたと傳へられて居る。

再びマキム監督の言を此にくりかへせば、「ニューマンは不思議なる人物である。されど彼の大なりしは其英國教會に止れる間にあつ

た。彼の學識、彼の才能、彼の筆、彼の辯、彼の人格の大は、敵も味方も、十九世紀英國宗教界の大立者たることを認める。されど彼の生涯の變化あまりに極端なりし爲め、變節せし如く非難せられた。思ふに彼は、極めて鋭敏なる良心の感覺を有てる人物である。時としては、神経過敏と思はるるまでに、鋭敏であつたのであろふ。従て、彼は事の黑白を曖昧に附することの出来ない性情であつたのである。されば一旦疑惑の生ぜしとき、之を解決する爲には、何物をも犠牲として辭せざる、眞摯にして、正直なる人物であつたであろふ。従て彼は一旦よしと信せし主義と立場には、極めて忠實であつた。初は福音派の自由説を抱いて居つたが、後に公會主義の合



二四二  
理的なるを認めて、之に移つた。更に後に羅馬主義の、之よりも遙かに合理的なるを認めたときに、又之れに移つた。而かも其の變化たるや、世の政治界の變節者の如き、一時の利便の爲に變節せしにあらす、又一時の出來心によらず。長き苦き心の吟味と戰闘の後。理性の承認と、意志の決斷と、良心の指示によつて爲せしものにて。之が爲には天下を敵としても、おのれの名譽と位置を擲つても、又最も苦き私交を割きても、尙之を斷行するの大膽と勇氣があつた。此點は彼の學才の驚くべきに劣らず、驚くべきである。唯惜らくは、彼にも似合す、英國教會を去し後、その缺點を指摘公言せしとであるが。之とて彼の立場よりせば、眞理に忠實なるの致す所にて。羅

馬教會の立場を眞實とせる彼には、其以外の團體の欠點弱點を攻るに至たのも、不徳でないとして居るのである。されば彼が英國公會に終りまで止まらざりしは、頗る遺憾なれど。人の良心は、他人より司配することが出來ない故是非もない。されどいづくにありても、彼は誠心誠意、神の榮の爲に一生をさへげて、遂に九十歳の高齢までつとめ終りしは、美しきことである。變化多き彼の生涯に、當然伴へる神學上の意見の是非は別としても。われらはかれの生涯にあらはれし、献身仕主の此の大精神にても學び度いと思ふ。  
ゴア監督の言ふ所によれば、ニューマンが牛津に携へ來し或畫の下に『汝らは肉の肥えたるものを食し、其毛にてつくれるものを多く



二四四  
つくれど、汝らは草を飼はさるなり」と書きて、當時の英國教會の狀態を嘆じかつ警めし由なるが。爾後公會主義は驚くべき進歩を爲した。若しニューマンにして一八四七年に於て、之を豫想し得たらんには、かく云はなかつたであらふ。

### 牛津近代の三名士終

大正二年二月二十五日印刷  
大正二年二月二十八日發行

不許  
複製

著者 仙臺市元鍛冶町八 稻垣陽一郎  
發行者 神戸市下山手通り五丁目十五番地 エチ、ゼ、フオス  
印刷者 東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地 佐藤保太郎  
印刷所 東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地 文祥堂印刷所  
發行所 神戸市中山手通り三丁目外五番 日本聖公會出版社



328  
177

# 稻垣氏譯書

## 三位一体の教義

ILLINGWORTH—The Doctrine of the Trinity.

菊版 定價 郵稅  
百五十頁 金八十錢  
並製 金六十五錢  
稅 金八錢

三位一体の教義は、教理史上曾て屢論争點たりしが、如く今後亦然らんとするの徴候あり。著者此に見る所ありて、新に辨證的方面より此教義の根據、其智的關係、其實功力を詳論せしもの、は即ち此の書にして、われらが「新編」の二字を冠せしもの、亦此故也。嘗に之れ神學の必備の參考書たるのみならず、苟も神學思想に興味あるもの、是非とも一讀を要すべきもの也。我社は茲に、牛津第一流の神學者の名著を経験ある譯筆によりて、日本の神學者に提供するの光榮を有す。

第一章 進化は神を前定す 第二章 批評に於ける主觀的分子 第三章 新約書に於ける三位一体 第四章 教會師父の間に於ける三位一体 第五章 新約書に於ける三位一体

## 新神學と舊宗教

GOBE—The New Theology and the Old Religion.

菊版 定價 郵稅  
百五十頁 金八十錢  
並製 金六十五錢  
稅 金八錢

ける教義的發達 第六章 教會師父の間に於ける教義の發達 第七章 萬事は奧義に終る 第八章 此教義の實功 第九章 其價値は其眞理を假定す 第十章 此教義の智識的關係 第十一章 創造行の繼續として 第十二章 總括と結論

カムベールの新神學なる運動は、實に久しく伏在せる思潮の或傾向を捕へて論壇に提供せるものなり。之に對する原來的監督は、如何なる位置にあるべきや。此時に當り、ゴアの出版せらるる、や、チャーチ、タイムスは、一われちの「さ」に聽かん、とする所を最も聽かん、欲する人より、聽けり、といへり。極東にありても、亦等しく多くの人の聽かん、さする所にして、而も譯筆亦之に稱ふ。實に我社は、チャーチ、タイムス記者の言を繰返すに、共に、此點を聲言せん、と欲す。

第一講 新神學 第二講 舊宗教 第三講 神の内住  
第四講 罪の觀念 第五講 キリストの神性の意義  
第六講 奇跡論 第七講 贖罪と聖書のインスピレーション  
第八講 新神學と聖公會

神戶市中山手通り三丁目外五

日本聖公會出版社



終

日本聖公會出版社